博物館学雑誌第9巻1号・2号合併号（通巻11号）28～32ページ　1984年3月

学芸活動発表の場としての「スタデー・コーナー」実践論

Practical Discussion of "Study Corner" Supported by the Collection and Researches

小野木　三　郎
Saburo　ONOGI

1. はじめに

博物館は，日常生活に欠くことのできない文化生活の道具で，一度ならず二度三度，必要に応じて何度も訪れるところである。常設展示室に限っても，一度に全部見てしまわないで，目的・課題をもち焦点をしぼって見るべきである。さらに博物館は，常設展示室だけが，地域住民の利用・活用の場であるだけではない。当館の場合には，特別展・資料紹介展・講演会・自然観察会・サンデー自然教室等の各種催し物，研修室・講堂を使用しての利用者側の自主的学習会（この場合，当館学芸員や収蔵庫資料の活用も可），図書資料室や収蔵庫資料の利用等，社会教育機関として，地域住民の方々の主体的自己教育の場づくりがなされている。

芹沢（1976）が論じているように，博物館教育活動の手段としては，「もの」による館内での展示は，自然史の本質からすると限界がある。「もの」と人の結びつきに終わって，自然史と人の結びつきにならないおそれがあり，野外観察会などの館外教育活動が重要視されなくてはならない。野外にあるがまゝに，そこに生きている動植物，そこにある岩石こそが，博物館資料であると考えてもいいし，当然自然学習の最高の材料である。しかし，ここでは，従来のように，博物館が収集・整理保存している「もの」による教育活動のうちの一面「展示」にしぼって考えてみることにする。

学芸員には，資料収集・調査研究・教育普及活動と，現実的には多面的で多様な知識技能を必要とする諸活動の実践が課せられている。学芸員の本質とかその理想像等についても，多くの先人が種々に論じている。しかし，学芸員の世界のように，その理論と現実の実態との間にギャップの大きいところは他にはない。資料を収集・保管しないで，その時その時に，「もの」を借り集めて展示しているだけでは博物館たりえない。資料の購入・寄託・寄贈あるいは借用等だけに頼っていては，学芸員の存在価値はないといえる。自然史の情報センター・教育センターであらねばならない面を考えると，自然史分野の本質からしても，学芸員自らがフィールドに出かけ，野外での調査研究を進める中で資料を収集することが原則である。そのために学芸員は，右目が研究者，左目が教育者であるべき宿命を負わされている。しかも，大学・研究機関等の教官との最大の違い，特殊性としては，資料収集・調査研究の成果を，「もの」を通して展示で発表するところにあるといってもいい。専門家向けの学術論文で発表するだけに終わらず，それを背景に，生涯教育の推進実践者であるところに，スペシャリスト性が求められる。

資料収集や調査研究の成果を，展示で発表する場としては，常設展示，特別展示，移動展，資料紹介展等々多くの場がある。しかし，日々の学芸活動が展示に反映されるにはどれも限度があり，十分でない面がある。そこで，定期的に発表できる場づくりの一方途として，「スタデー・コーナー」を設けているので，その基本的な構えと実践を報告し，多くの方々の批判を得るとともに，

＊　おのぎさぶろう
岐阜県博物館

学芸活動実践の参考資料としたい。

2. スタデー・コーナーの基本的な構え

正面玄関ロビーが殺風景であるという入館者の声，自然展示室2の入口がわかりにくく，自然展示室1を見学後，正面階段から2階へ上る入館者が目立つという入館者の動向観察の結果をふまえ，学芸員の手づくりによる小課題展示コーナーを，自然展示室2入口横に設けようとしたのがきっかけであった。展示ケース三台を横につなげた（写真参照）わずかなスペースであるが，資料収集・調査研究の成果を活用し，担当学芸員が気軽に「もの」を使って展示発表する場とし，植物・動物・地学の三分野が輪番制で担当し，実施に当っては，次のようなことを留意点にしている。

(1)展示テーマは，当館のもつ地域性と結びついたもので，季節性・話題性にも目を向けた具体的なものでありたい。

(2)自然の歴史性・自然の多様性・自然と人間生活との関連性といった自然史を支える三本柱に注目し，テーマや展示構成を考えたい。

(3)資料の価値を提示するだけにとどまらず，資料を用いて，考えや主張を表現・説明することにより，見る側の人々に，感動と理解，発見と探究の空間を提供するようにしたい。

3. 過去の実践例

(1)「イヌの名まえをもつ植物」昭和57年1月

◉展示のねらい…イヌ年の年頭にあたり，イヌの名まえのつく植物を，おし葉標本で紹介するが，イヌ～はあくまでも興味づけ，導入にすぎず，基調には，植物への関心と植物知識の基礎理解におく。そのために，シバ犬のはく製標本1点，オオイヌノフグリ，タチイヌノフグリ，イヌタデ，イヌザンショウなどのおし葉標本30点，図表，写真を使い，◉植物の名まえは，その由来ごと知ると憶えやすく忘れないこと　◉植物と知り合いになる方法（一種と知り合いその近縁種に広がること）◉カメラによる植物採集のすすめの三点を主な展示内容とした。

◉全体解説パネル原稿…「あけましておめでとうございます。イヌ～の名をもった植物はたくさんあります。どうしたわけか，食べられる植物に対して食べられないものに『イヌ…』がついたり，『よくない，おとっている，どうにもならない』と，いやしめたり軽んずる意味で使われています。犬死に，犬侍，犬畜生などと同じ使いかたです。

またイヌのひげや睾丸など，姿形が似ていることからつけられたものもあります。植物の名まえは，そのいわれを知ると，忘れないでおぼえられるものです。自然に親しみ知る第一歩は，植物の名まえから…」

各分野とも，毎回展示のねらいを明らかにし，「もの」を並べて見せるだけでなく，「もの」を素材として，基礎知識の普及に重点があるもの，自然への関心づけに重点をおくもの，自然の見方・科学的な見方に重点があるものなど，担当学芸員が創意工夫している。これまで実施したものと，昭和59年度に予定しているテーマは，次表のようである。（写真参照）

4. 実践の反省から

(1)学芸員の手づくりによる努力の結晶を，より多くの人

	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年
1月	鳥の名をもつ植物	イヌの名をもつ植物(写真1)	岐阜県のシダ	植物観察のすすめ
2月	エサ場に来る鳥たち	海の貝と陸の貝		
3月	三葉虫の世界	サンゴの化石	長良川流域の岩石	ふるさとの火山岩
4月	ツツジとスミレの仲間	植物標本のつくり方(写真3.4)		
5月	チョウの仲間	地層を調べよう	ふるさとの野鳥たち	長良川のさかな（写真7・8）
6月	ほ乳動物の祖先	ガの仲間		
7月	ふえ続ける帰化植物	植物観察のすすめ	山の植物～垂直分布とは～（写真2）	高山植物とは
8月	夏の虫たち	ハチの生活		
9月	身近な鉱物（写真5・6）	ありふれた資源～石材～	赤坂金生山の化石	石灰岩とカコウ岩
10月	野菊の仲間	植物をよく見よう		
11月	トンボの世界	ふるさとの魚たち	ひるが野高原の昆虫	ネズミのなかま
12月	火砕流の噴火	こん虫の冬ごし		

人に見ていただきたいとの願いと，長いように思えて短かい1ヶ月間，学芸員の多種多様な諸活動の多忙さとから，三年目からは年6回にして実施している。

(2)資料収集・調査研究活動が保証されておれば，展示テーマも次々と見つかるし，過去と同一テーマであっても，登場する資料や具体的内容面で異なる展示ができ，今後も永続して実践していけると考えている。

(3)学芸活動の全機能ー資料収集・調査研究・展示による教育普及ーが，濃縮された学芸活動の実践の場となっており，学芸員自身の多面的な博物館学実践のための自己研修に役立っている。たとえば……

①資料収集・調査研究の成果を，「もの」を通して，どのように展示発表するか，展示シナリオづくりや展示哲学の自己研修に役立っている。

②展示を完成させるまでの過程で，解説文の内容・文章表現，ラベルづくり，図表解説板等の自作など，展示技術面での自己研修に役立っている。

③サンデー自然教室での，学芸員の指導による展示解説の場として活用でき，ヒトがそこにいて行なう展示解説の教育実践となり，解説活動の自己研修に役立っている。

※サンデー自然教室とは，

入館者の多い日曜日に，学芸員が担当して行なう展示解説のサービスである。入館者に参加を呼びかけて，常設展示やスタデー・コーナー，資料紹介展，特別展など，担当学芸員の意図により，その日のテーマを設け，約1時間，研修室，講堂，展示室等を活用して行なっている学習会である。

※展示解説についての基本的な構え

来館者は，●まったく自由な個人である。●何の強制もなく，自由な時間を過ごすために来ている。●何の責任もなく，どこのだれであるかも不明のままでよい。●気分転換，娯楽，ストレス解消のために来ている人もある。●意欲の強弱・知的水準も千差萬別である。こうした実態を前提条件とすると，展示解説とは，◎解説文と同じ内容をしゃべることではない。◎資料そのものの学問的深まりや広がりをねらうのなら，人がいて解説しなくても展示解説書などの発行で十分まかなえる。◎教育機器を多用すれば，音響・映像つきで，わかりやすくドラマチックな解説サービスも可能である。このように考えると，学芸員がそこにいて，ヒトでなくてはできない展示解説とは，○画一的・全体的に教え込むことではない。○相手に応じて，柔軟性をもち，その場その場で，自己学習することの楽しさを教え，学習を援助することといえる。そのためには，学芸員は，学問的に深い専門知識，人間性と心理学の知識や技術，教育学の知識と技術を持ち合わせたスペシャリストたるべく自己研修につとめ，

◎通り過ぎようとする人の目を止めさせる。◎「もの」についての好奇心を，堀り起こしゆさぶる。◎驚ろきの感情を呼び起こさせる。◎疑問を抱かせ，自由に質問することを促がす。このようなことを主眼として，展示解説を行なうべきである，と考えている。

※スタデー・コーナーの実践と，それを素材としたサンデー自然教室の開催は，以上のような展示解説の教育実践研究の場としては，有効であり自己研修に役立っている。

(4)入館者の反応については，科学的な教育評価を行なっていないので，客観的にまとめることはできない。日常の入館者の動向観察結果によると，動・植・地学分野とも，毎回「実物資料」を中心に展示してあるため，足を止めてじっくり見学されていることは確かである。常設の自然展示室2，「震災と防災」「雪と生活」コーナーのように，解説文，写真，図表等だけで構成され，「もの」が不在のコーナーは，ほとんどの入館者がチラリと視線を投げかけるだけで素通りしがちなことと比較すると，初期の目的を達成し人気のあるコーナーとなっている。常設展示室内にも，スタデー・コーナー的機能をもった展示スペースを設けるべきであるといえる。

(5)入館者の反応の一事例

このコーナーを楽しみにされ，親子で何度も博物館へ来てくださる家族がある。心豊かで知的な家庭生活に，博物館をうまく密着させていられるすばらしく主体的なご家庭である。『私の楽しみなものは「スタデー・コーナーです。資料をカメラで写真におさめます。解説文・説明文も書き写し，じっくりメモしておきます。帰ってから，自分なりにまとめ，名称・説明をそえてアルバムにします。不備を補うために再館して，再読，再見学，写真の補足もします。こうして編集したアルバムが，特別展・資料紹介展等も含め，もう何冊もたまってきました。これがいつか，わが家で百科全書的役割を果たす日が来るでしょう。』と，そのご主人が友の会会報に書いておられた。たとえ特殊な一事例とはいえ，これほど博物館活用が主体的で上手なご家庭があることは，学芸員への今後への力強い励ま

しになっている。

5. おわりに

博物館には，研究機能と教育機能とが必然的に同居している。しかし，大学・研究所等の機関とは異なる面があり，そのひとつには，「もの」という具体物を通して，資料収集・調査研究の成果を，だれにもわかりやすく提示する一方途，「展示」による教育普及の活動がある。本報告は，常設展示や特別展示とは異なった立場から，こまわりのきく定期的な「スタデー・コーナー」を，学芸活動の発表の場としてとらえた実践例を示したものである。その過程には，資料収集活動・調査研究活動・教育普及活動といった学芸活動が濃縮されており，学芸員の自己研修の場としても有効である。「もの」を中心教材として，確かなシナリオにもとづいて展示すれば，入館者の関心を呼び，入館者の自己学習の場としても，有効であることが期待できる。

最後に，本報告に先立つこれまでの実践は，学芸部長，自然係長を中心に，自然分野の担当学芸職員が，自然部会で討議・検討を重ね，基本線を共通理解した中で，実施の仕事を動・植・地学三分野で分担推進しているものである。自然係の共同実践者である地学；笠原芳雄，動物；安藤志郎・鈴木功・柴田佳章（旧職員）・宮田伸也（旧職員）の氏名を列記し，末筆ながら感謝の意を表する。

参考文献

芹沢俊介　自然史系中小博物館における教育活動の構成
博物館学雑誌第1巻第2号（1976）

写真1，昭和57年1月，正月のあいさつをかねて……

写真3，昭和57年4月

写真2，昭和58年7月～8月 御岳山の飛騨側を舞台として……

写真4，昭和57年4月，標本作成過程も展示して……

写真5・6，9月，テレビの廃品も活用して……

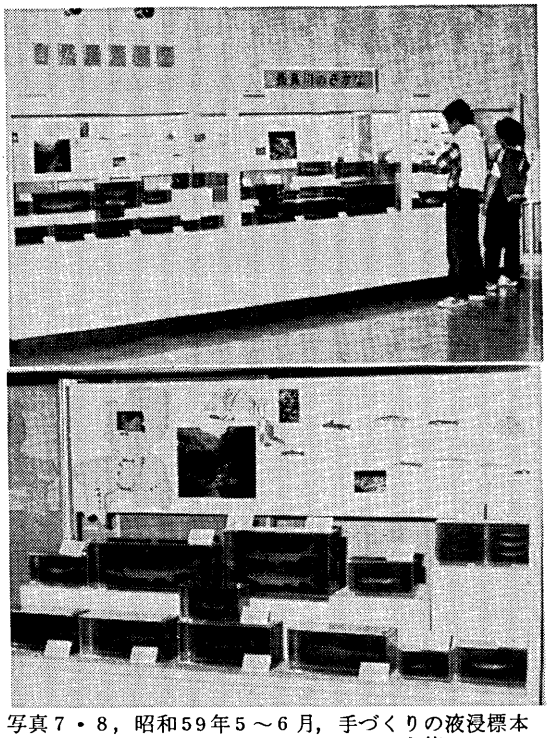

写真7・8，昭和59年5～6月，手づくりの液浸標本を使って……
［上，全体，下，部分のようす］